

生物標本

水族館へ行こう!

京都大学白浜水族館



白浜水族館には、生物標本を積極的に活用するための展示スペースがある。第2水槽室から第3水槽室への渡り廊下左側の

生物標本は分類学において重要な役割を持つ。新種を発表する際に使

われた標本は「タイプ標本」といい、いわば生物分類の基準となるものだ。ウォールケースではその実例としてフジツボ

さまざまな生物が標本展示されているウォールケース

72

宮崎 勝己

類のタイプ標本を展示している。

白浜水族館ではなるべく多くの分類群の展示に努めているが、飼育が難しい分類群や、あまりにもサイズが小さく水槽に入れたのでは姿を見せられない分類群などは、標本で見やすく展示している。

かつては水族館は生きた水生生物の展示、博物館は標本の展示と、かなりはっきりと色分けできたが、最近では、白浜水族館のように標本展示に力を入れている水族館があれば、海南市の県立自然博物館のように、水族館並みの設備で、生きた水生生物を展示する博物館もある。瀬戸臨海実験所は86年、白浜水族館は78年の歴史があり、膨大な海洋生物の標本が蓄積されている。そのうち「タイプ標本」

と、学術的価値が特に高いと判断された「貴重標本」については、臨海実験所研究棟標本室に保管され、きちんと管理されている。それ以外の大部分の標本は、水族館3階を占める標本室（一般公開）で保管されているが、残念ながらその管理は十分とは言えない。標本の正確な数すら不明である。

そのよつな中、ようやく昨年から所蔵標本のデータベース（DB）化に本格的に取り組んでいる。DBの完成の暁には、地球規模生物多様性情報機構（GBIF）という国際協力プロジェクト機構によって、国内外に一般公開される。水族館の標本棚で長い眠りについていた標本たちが、世界の表舞台に登場する日も近いのかもしれない。（京都大学講師）

DB化でもっと光を